AG5だより

日本人学校・補習授業校を応援します！

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業（https://ag-5.jp）

サンパウロ日本人学校における「遠隔」研究の取り組み

サンパウロ日本人学校校長　曽川和則

日本とは地球の真反対に位置するブラジルにあっても、今や日本の出来事や情報がリアルタイムに獲得できます。情報通信技術（ＩＣＴ）の発達はめざましく、地球の隅々までインターネットで結ばれ、どこにいても人と人とのコミュニケーションが可能な新時代を迎えています。まさに、グローバルな社会の到来です。

本校はこの時代の要請を受け、高度グローバル人材育成を目指し、「サンパウロ日本人学校」ならではの「遠隔」研究に取り組んでいます。ご紹介しましょう。

はじめに

このような時代にあって、世界各地の在外教育施設が有する人材や地理的環境を活かすことで、高度なグローバル人材育成に大きな役割を担うことができます。

サンパウロ日本人学校（以下、サ日校）には、日本各地から教育の未来を担う優秀な教師が集い、地球の未来を創る優れた人材を育成しています。グローバル化が進行し、ＩＣＴの有効活用が求められる現代、日本の真反対にある本校が先陣を切り、「遠隔」をキーワードに先進的プログラムを開発・提供することは在外教育施設や日本国内の学校の新たな学びの発展に一石を投じることになるでしょう。そのゴールに向かって、今、サ日校は動き始めています。

本校の実態と児童生徒の様子

(1) 本校の実態

一九六七年に児童数二十八名でスタートした本校は、今年度で五十三年目を数える歴史と伝統があります。一九七四年に現在のカンポリンポの地に移転し、世界の日本人学校の中でも十二万平方メートルという広大な敷地を有する学校です。全盛期の一九八〇年代初頭には、九〇〇名を超える子どもたちが在籍していました。その後、児童生徒数は大きく減少し、ここ数年は一五〇～二〇〇名の規模となっています。

昨年度四月当初は一六九名からのスタートでした。今年度四月当初は、児童生徒併せて一五七名の在籍であり、小学部一年生が二クラス、小学部二年生～中学部は各学年一クラスの学級編成となっています。

(2) 児童生徒の様子

中南米の拠点都市として機能するサンパウロには、日本から多くの企業が進出しています。駐在員の任期は約三年で、帯同する子弟が在籍し、本校校歌に歌われるように「今日もカンポリンポの丘に立ち」「ここにわれらあり」「ここに希望あり」の学びを積み重ねています。しかしながら、昨年度末に発生した新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、本校においても、ブラジルを離れて日本へ一時帰国する家庭が増加しています。五月末現在においては、一三七名の在籍者の内、七十六名が二重在籍等の制度を活用して日本へ帰国し、サンパウロに残っている児童生徒数は六十一名となっています。ブラジル国内でコロナ禍が深刻化する状況を受け、この傾向は今後も強まるものと思われます。

AG5の研究への道

(1) 研究のスタート

「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業（ＡＧ５）」を文部科学省から委託された海外子女教育振興財団より昨年五月、サ日校に研究依頼がありました。ＡＧ５は在外教育施設特有の課題の解消並びに高度グローバル人材の育成を目的としています。依頼されたのは、日本人学校の教育の質をより一層高めるために、ＩＣＴの「遠隔」技術を活用するという実践です。具体的な研究の中身は次のとおりです。

- 近隣にあるリオ・デ・ジャネイロ日本人学校と連携した合同研究
- 遠隔での教員研修による教員の質の向上を図る研究
- 遠隔による合同授業による多様な人々とのつながりを実現する教育の在り方の研究
- 日本人学校で必要とされる遠隔教育に係る取り組み

この「遠隔」研究は、本校を含め中南米にある次の四つの日本人学校に託されました。

- アグアスカリエンテス日本人学校（メキシコ、以下ＡＣ）
- サン・ホセ日本人学校（コスタリカ、以下ＳＪ）

・リオ・デ・ジャネイロ日本人学校（ブラジル、以下ＲＪ）
・サンパウロ日本人学校（ブラジル、以下ＳＰ）

合同研究は「ＡＣ」－「ＳＪ」間、及び「ＲＪ」－「ＳＰ」間とされ、四校合同研究の方向性も示されました。新たな時代の新たな可能性を見出すサ日校の「遠隔」研究はこうしてスタートしたのです。

(2) 研究の柱立て

ＡＧ５から指定を受けた研究テーマは、「ＩＣＴを活用した遠隔での教員研修および授業実践のプログラム開発」です。私たちはこのプロジェクトを立ち上げるにあたり、その柱となる目的や内容を明確にした「計画」づくりに取り組みました。

まずは校内での構想です。新学習指導要領への移行期にあたり、本校では独自に「特別の教科道徳」に焦点を当て校内研究をスタートさせていましたが、多様な考えを引き出し、討論し、価値を見出す道徳に「遠隔」が生かせないかと考えました。

次にＲＪとの打合せです。六月、ＲＪの校長先生と研究主任を本校に迎え、互いの計画の擦り合わせを行いました。そこで確立した研究の目的は、「日本人学校における高度グローバル人材の育成をめざし、日本人学校の教育の質を高めることを目的に、他の日本人学校と連携して、遠隔操作による教師研修や合同授業を実施し、その評価、成果も含めてプログラムを開発する」です。

このゴールを目指し、研究一年目は、ＳＰが道徳、ＲＪが総合的な学習の時間やプログラミング教育を通しての「遠隔」研究に取り組むこととしました。そして、互いに教員研修や合同での遠隔授業の場を仕組み、研究成果や課題について検証していくこととしました。

研究の実際

(1) 遠隔環境整備と通信実験

具体的な研究の初段階として、まず取り組んだのは、「遠隔」の環境整備です。インターネット回線の確認や遠隔通信に必要な機器を洗い出し、研究委託金を活用しながら整備を図りました。しかしながら、ブラジル国内では必要とする機材を確保することがなかなか難しく、当面は個人所有の通信端末からの通信実験を並行して行うこととなりました。七月、ＲＪ－ＳＰ間での通信実験（LineやSkype等の活用）に取り組み、互いに顔を合わせ、学校や職員紹介から合同研究が始まりました。ここでは六月の打合せで立てた計画を両校で確認し合い、二学期からの相互交流や遠隔授業の可能性・実現について共通認識を深め合うことを目的としました。

(2) 合同遠隔教員研修

九月、ＡＧ５事務局より本研究のコーディネーター及び講師決定の知らせがあり、本プロジェクトの推進体制が構築されました。同時にＲＪ－ＳＰ間と日本のＡＧ５本部とをZoomでつないで開催された合同遠隔教員研修では、明治大学の岸磨貴子先生に「遠隔」のよさや機器購入についての助言をいただきました。

また、十月に開催された四校合同の遠隔教員研修では、中南米にある四つの研究校のつながりを築くと共に、岸先生から「遠隔授業の概要及び本プロジェクトの進め方」の講義をいただき、これから取り組む遠隔授業のイメージを描き出すことができました。中南米四校が合同研修を重ね合うスタートとして、未来の新たな授業「遠隔」のモデル発信に強い決意を深め合った瞬間でもありました。

(3) ＲＪ－ＳＰ合同の取り組み

十一月、ＲＪ－ＳＰの両校がまず取り組んだのはＲＪを主催とする「プログラミング教育」の教員研修でした。ＲＪの研究主任を講師として、実際に私たち教師が「プログラミング」の模擬授業を体験し、子どもたちの指導に活かしていく手法を学び合いました。

ＲＪ－ＳＰ合同遠隔授業「プログラミング学習」

十二月には、中学部三年生及び小学部五年生で「プログラミング」をテーマとする合同遠隔授業を仕組み、遠隔での授業の進め方や授業の成果、課題を検討しました。

この授業は、「ゲストティーチャー型」と称され、ＲＪにいる講師とテレビ会議システムを使って行う授業です。多様な専門を持つ方々に遠隔で授業をしてもらうことで、児童生徒の専門的な知識が増え、自分たちの世界を広げることができます。

しかし一方通行の授業となり、互いの考えを深め合うという点では課題が生じました。そこで、本校が主催し提案したのは「合同授業型」の道徳授業。テレビ会議システムを使い、離れたＲＪとＳＰの教室をつな

げて同じ内容の学習に取り組むという交流を意図したものでした。

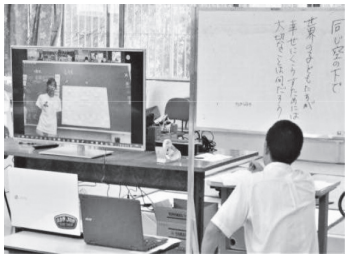
（4）RJ－SP道徳遠隔授業

一月、SP小学部五年生とRJ小学部五・六年生を遠隔でつないで「道徳」の合同授業を実践しました。学習の主題は「同じ地球に生きている（国際理解・国際親善）」です。教材には「同じ空の下」（新しい道徳五東京書籍）を取り上げました。

道徳の授業のポイントは子どもの考えが深まる中心発問の場面です。遠隔授業としてのポイントもこの場面に設定してワークショップの交流活動を仕組むなど、児童の多様な考え方を導き出す工夫をしました。

学習のふり返り（評価）については、合同遠隔教員研修で岸先生に教えていただいた「ルーブリック評価」（学習の達成度を表を用いて測定する評価方法）を活用しました。個々の児童がそれぞれに目標を設定することで、交流と学習のめあてを意識して取り組むことができました。

しかしながら互いの考えにふれるというよさを実感したものの、ワークショップでの交流の場面では、それぞれの考えを紹介し合うことに終始し、考えを深め練り合うという点で課題が生じました。通信のタイムラグによるストレスが子どもたちの反応を鈍くしているという指摘もあります。価値の葛藤に迫る指導技術も必要とされ、考えを深め合う道徳での遠隔授業としては、「いつ」「どこで」「何をねらいとして」遠隔交流を仕組むかが大きなポイントとなることが授業後の研究協議会で出されました。



RJ－SP合同遠隔「道徳授業」

講師による学校訪問

研究一年目のまとめの時期となる二月、AG5事務局の後藤彰夫先生と葭和宣先生が来られました。目的は「遠隔」研究の進捗状況や課題についての共有と今後の取り組みの方向性を見出すことです。

お二人には本校の実態を見ていただき、子どもや職員にも励ましの言葉や助言をいただきました。教員研修の中では、「遠隔」研究の概要や重要性を示していただき、今の本校の研究が今後の教育の未来に大きな力となることを改めて確信することができました。

その後の四校合同遠隔教員研修では、岸先生に児童生徒のふり返りの支援としてシンキングツールやパターンランゲージなどを紹介していただきました。評価の指標であるルーブリックと併せ、「遠隔」をキーワードとした授業づくりへの大きなヒントと方向性を得ることができました。

「遠隔」による本校独自の実践

二月以降、世界各地で新型コロナウイルスが猛威を振るい、国や地域を越えた人の移動が制限される緊急事態となりました。サ日校でも、高校受験のため十二月末に帰国していた生徒がブラジルに戻ることが難しい状況となりました。卒業式は三月十二日。生徒にとっては一生に一度の中学卒業です。そこで日本とサ日校をICTでつなぐことで、その生徒にもリアルタイムで卒業証書を渡し、サンパウロの卒業生として喜びを分かち合うことができました。「遠隔」研究に取り組んできたからこそ、成し遂げられた晴れ舞台です。

卒業式の日に行われた日本との「遠隔卒業式」

新年度、コロナ禍により学校再開の見通しが立たない中、本校が始業式や入学式をオンラインで挙行し、学校を動かせていること、子どもたちの学力保障のためにオンライン授業を継続できていることは、「遠隔」研究に取り組んできた自信と実績があるからに他なりません。

今後に向けて

研究二年目に入る今年度は深化を図る年です。学びを水平的に広げていく「遠隔」のよさをどこにどう活かすべきか、その事例を提供することがゴールです。

同じブラジルにある共通点と同時に相違点も多いRJとSPが共に求める「子ども像」を確立しながら、「遠隔」で付けたい力を具体化していきたいと考えています。

コロナ禍にあっても前向きに生きる子どもたち、日本とブラジルの架け橋となって世界に羽ばたく姿を思い描き、遠くにいてもつながり合う高度グローバル人材の確かな育成をめざし、さらに挑戦を続けます。